

『枕草子』における命題形成

藤原浩史

1 はじめに

『枕草子』の「もの」型章段は、冒頭に章段主題をおき、事例を羅列することを定型とする。これを単純に事例の提示したものと見ると、文章の意味はまとまらない。しかし、対話的構造を想定し、潜在的な論理を形成するものとして理解すると、首尾一貫した情報体として整合する⁽¹⁾。ひとつひとつの事例提示は、著者から読者に命題を与えることを目的とし、その連鎖によってひとつの論理を形成することである。

命題というものは、概念のまとまりから形成される。『枕草子』における概念の形成については、藤原(2010)において副助詞「など」に着眼して考察した。「など」は次の「雨など」のように、ある特定の事物に代表される集合を意味するが、『枕草子』においては単純ではない。

- (1) a 夏は夜。
- b 月のころはさらなり。
- c 闇もなほ。
- d 螢のおほく飛びちがひたる。
- e また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。
- f 雨など降るもをかし。

(1段 春はあけぼの)

f「雨など」は、下接する「降る」と関連して、「『雨』を代表とする『降る』属性を共有する集合」となりそうであるが、aに「夏」とあるので、雪でも霰でもありえないから、それでは意味がまとまらない。

ここでは、先行文脈が意味の確定に働いている。a「夏は夜」とするのは、当然すぎて語られないが、暑い夏にあって涼感が得られる時間であることを理由とする⁽²⁾。(1)は、この涼感を与えるものを夏の美として列挙するところであり、それゆえ、涼感をもたらすb青白い満月の光を提示してその美を確認する。そして、その光量をbの満月からeの一瞬の螢の光までしほりこむ配列をとっている。(1)は、次の(2)のような命題の列挙となる。

(2)

- (2) a <涼感> → <美>
b <涼感> + <光・大> → <美・大>
d <涼感> + <光・中> → <美・中>
e <涼感> + <光・小> → <美・小>
↓ ↓
f <涼感> + <光・無> → <美・極小>

a → e の連鎖につづけて、f「雨など降る」と提示すると、それは月や蛍に共通した涼感を有するものでなければならない。そして、光量を減じていくのであるから、光がまったくないことを意味する。かくしてfは「光がまったくなくても、雨が降ると涼やかだから、私はそれにも美を感じる」と意味がまとまる。「雨など」が担う意味は、先行文脈から意味を継承すること、並列する事例と対比することによって形成される。⁽³⁾

「雨など降る」という概念だけでなく、それぞれの事例は、この文脈の中で意味を継承・対比することで(2)のように命題化される。つまり、「など」による概念形成に観察される力は、概念の複合体である命題形成にも働いていると考えられる。本稿では、『枕草子』の「もの」型章段の命題形成の方法を明らかにするものである。

なお、用例の引用は、『新編日本古典文学全集(18) 枕草子』によるが、一文単位で改行をほどこし、上記(1)のように文番号を記号で付与する。

2 先行文脈の継承

先行文脈が事例の命題化にいかに関与しているか、まず、異なる章段に現れる同じ単語による事例提示によって確認する。もしも、『枕草子』が事例提示そのものを事とするものであるならば、章段が異なってもそれは共通する意味をもつはずである。しかし、そうではなく、先行文脈に依存して意味の形成をおこなっているならば、同じ単語による事例提示は同じ意味とはならず、章段ごとに意味が異なるはずである。本節では「くだ物」と「かりのこ」を取り上げる。

2. 1 「くだ物」

2. 1. 1 「大きにてよきもの」章段

「大きにてよきもの」章段では、(3)のように、b「家」とc「餌袋」を提示することによって、小さくても事は足りるが、大きい方が心にゆとりをもたらすことを、まず提示する。

- (3) a 大きにてよきもの
b 家。
c 餌袋。
d 法師。

- e くだ物。
 - f 牛。
 - g 松の木。
 - h 硯の墨。
- 〈以下略〉。

(217段 大きにてよきもの)

d「法師」はそれ自体から意味するところの命題を特定することが難しいが、並列する事例が貴族の生活に関わるものが列挙されているので、「法師」も存在そのものではなく、貴族がそれを招聘する際にことに特定される。ならば、法会を執り行う存在と特定される。そこに、先行文脈がもつ意味を継承すると「法師の価値に体の大小は関係ないが、法会の中心が大柄だと見ていて安心感がある」ということになる。儀式の中心は、視覚的に際だった方がよい。

つづく e「くだもの」であるが、法会を先行事例とするならば、これも貴族の行事の場面に特定される。「くだ物」は、(4)のように、酒、肴とともに、饗応の場にそえられる用例が多い。漢語では「菓子」と表記されるが、(5)では酒肴に先立って「交菓子」が供されている⁽⁴⁾。酒・肴とともに、宴席の華やかさを演出する晴れの場の象徴である。

- (4) 廊に殿上人いとおほかり。殿の御前に宮司召して、「くだ物、さかななど召させよ。人々酔はせ」など仰せらるる。(100段 淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など)
- (5) 左大臣及卿相候殿上、被出交菓子三盞、其後肴物、有酒、々後肴湯漬、々々後亦有酒、(『小右記』長和2年9月25日)

「くだ物」は、貴族の宴席の象徴の一つである。食品として見るとその大小に価値があるわけではなく、その場に存在することに価値がある。しかし、それが標準よりも大きいならば、それによって場の華やかさが一層演出される。この「くだ物」は b・c からの意味の継承があり、そして、d の法会と対比的に宴席という特定を得て、「晴の場における象徴」という命題を形成するものである。

2. 1. 2 「つれづれなぐさむもの」章段

「つれづれなぐさむもの」章段は、(6)のように、「碁」、「双六」と、ボードゲームの提示からはじまる。無聊の解消が章段の主題であるから、知性の活性化を目的として、対人性と相互性の要素を卓立するものと目される。そして、b「碁」→c「双六」の差違は、偶然性が加わることであり、c「双六」→d「物語」においては、「盤」という束縛がとれる。そして、この順に他者から受ける刺激は、想定外の要素が増える配列となっている⁽⁵⁾。

- (6) a つれづれなぐさむもの

(4)

- b 碁。
- c 双六。
- d 物語。
- e 三つ四つのちごの、物をかしよう言ふ。
- f また、いと小さきちごの物語し、たがへなど言ふわざしたる。
- g くだ物。
- h 男などのうちさるがひ、物よく言ふが来たるを、物忌みなれど、入れつかし。

(134 段 つれづれなぐさむもの)

d「物語」は「大人同士の対話」、eは「(言語形成期の)満2歳児の言語表現」、f「それより小さい赤ちゃんのこぼらしきもの」と、言語の規範からはずれた事例の魅力に進む。これにより、清少納言は、他者の想定していない振る舞いによって、無聊な状況に知的な刺激が得られることを述べている。

この文脈を受けてg「くだ物」がある。これ自体を直接的に「つれづれなぐさむもの」と見ることは難しい。しかし、先行文脈を継承しているとすると、「想定していなかったもの」として提示されることになる。想定される食事というものは朝夕に摂るものであるから、それ以外の「不定期に出る楽しみ」を意味する命題となる。

これを受けて章段末尾hにおいて、その知的な刺激を求める欲求は、社会的な制約(物忌み)にまさると結ぶ。g「くだ物」は、外部からの知的な刺激は「ゲーム」に限定されるものでもなく、「対話」に固定されるものでもなく、「人」に固定されるものでもないことを述べて、それが人間に必要な知的な刺激であることをhでまとめるために不可欠な命題を構成する。

2. 1. 3 二つの「くだ物」

このように、「大きにてよきもの」章段の「くだ物」と、「つれづれなぐさむもの」章段における「くだ物」は、同じ単語でありながら、まったく異なる命題を形成する。

「大きにてよきもの」章段における「くだもの」は、先行文脈によって、貴族の宴席において「酒・肴」と並んで出されるそれに特定され、その場を特徴付けるものとして用いられている。章段主題に対して、「宴席のシンボル」は標準よりも大きめであることが、参加者の気持ちを励起するのである。それは直前の「仏事のシンボル」と並ぶことによって、確定される。

一方、「つれづれなぐさむもの」章段における「くだもの」は、先行文脈によって、貴族の無聊な日常生活に登場するものに特定され、通常の食事に対立するものとして用いられている。予期せぬ外部からの刺激一般という命題となる。

各章段にはそれぞれ主張するところがあり、論理を形成するのであるが、「くだ物」は明らかにそれぞれの論理のパーツとして機能する。そして、それは文脈の中で意味を獲得して、命題となることがわかる。

2. 2 「かりのこ」

2. 2. 1 「あてなるもの」章段

「あてなるもの」章段は、「薄紫のあこめ」に「白色の汗衫」を重ねる事例を第一とする。「あてなり」は、社会的な地位に由来する美であるが、bでは上品さを感じるにもかかわらず、身分の低い童女の装束として、この社会的な地位と抵触させる。ゆえに、もしbが美であれば、その品位は身分ではなく、色に由来することになる。そうすると、上品さは「白色」と「紫色」の2つの要素と、その関係性である「襲」の3点から分析できる。

- (7)a あてなるもの
- b 薄色に白襲の汗衫。
- c かりのこ。
- d 削氷に甘葛づら入れて、あたらしき鏡に入れたる。
- e 水晶の数珠。
- f 藤の花。
- g 梅花に雪の降りかかりたる。
- h いみじううつくしきちごのいちごなど食くひたる。

(40段 あてなるもの)

(7)では、c「かりのこ」以下eまで、「白色」の事例が並ぶ。3点の問題意識の第一である。この「かりのこ」すなわち「タマゴ」は、白色の事例の発端である。後続の「削氷」と「鏡」にくらべて、輝きに劣る。「水晶」は輝きがさらに強く、透明性がある。ただし、この三つは、「丸さ」を共通素性として与えられており、(8)のように連続したものとして理解するよう指定される。

- (8) c 〈白色〉 + 〈丸型〉 → 〈美?〉
- d 〈白色〉 + 〈丸型〉 + 〈輝き〉 → 〈美〉
- e 〈白色〉 + 〈丸型〉 + 〈輝き〉 + 〈透明〉 → 〈美〉 + 〈精神的価値〉

eは、宝石である「水晶」、法具としての「数珠」であり、経済的価値・精神的価値がきわめて高い。「かりのこ」は「白色であり、輝きがなく、不透明である」が、そこにつながる存在であることを示す。逆算すると、「白色」は、社会的・精神的に価値がある出発点と特定される。それを論証する過程の発端として、「白く丸いもの」という命題を「かりのこ」は形成する。

2. 2. 2 「うつくしきもの」章段

「うつくしきもの」章段は、冒頭に「ちごの顔」そのものではなく、「瓜にかきたる」それを提示する。ついで人の「子」ではなく、「雀の子」を提示する。こどもは絵だけでも、人間でなくても可愛いと思う、その理由を考察する章段である。以下の幼児の

(6)

発達段階に応じて、大人の能力の萌芽があるとともに、未熟であることが指摘される。成長した先の可能性に根拠があることを論ずる章段である。

- (9) a うつくしきもの
b 瓜にかきたるちごの顔。
c 雀の子のねず鳴きするにをどり来くる。
〈中略〉
d 雛の調度。
e 蓮の浮葉はのいと小さきを、池より取りあげたる。
f 葵のいと小さき。
〈中略〉
g かりのこ。
h 瑠璃の壺。
(145 段 うつくしきもの)

そして、貴族生活の原点を d「雛の調度」、極楽浄土の原点を芽吹いた蓮の種(e)、加茂祭の象徴を葵の芽生え(f)で表示し、すばらしい世界につながるその原点に注目する。その結語部分で g「かりのこ」が出る。h「瑠璃の壺」は仏舎利を入れる最も小さい壺であるが、小さくともそこに塔が立ち、寺ができ、人が集まる。その究極であり、仏法の種である。その対となる「かりのこ」は「生命の原点」を意味する。

2. 2. 3 二つの「かりのこ」

「あてなるもの」の「かりのこ」は先行文脈が色についての論及であるため、「白色」という意味素性が導き出される。そして、「かりのこ」がもつ「丸く、不透明、輝きなし」という要素から、後続する事例に「透明」「輝き」という要素を操作して、命題を形成する根拠となる。

一方、「うつくしきもの」においては、小さく未熟な存在が、後に大きくすばらしい存在になることを先行文脈で提示する。その究極の存在が「かりのこ」であり、それは「生命の原点」という命題となる。

表現としては同じ「かりのこ」が、先行文脈の継承と平行する事例の対比から、それぞれ異なる命題を形成することがわかる。ここで重要なのは、単語の意味そのものよりも、文脈的に生成される意味が卓越することであり、これらが論理を構成するための素材であることである。そして、その手法は、事例を解釈する情報をまず与え、それにより、指示物を特定化し、分析可能な集合体として提示するのである。

3 並列事例との対比

3. 1 「暑げなるもの」章段

「など」型の名詞句に見られた意味形成は、一般の名詞句にも同様に働き、事物そのものではなく、それに代表される命題を形成する。前項では先行文脈が事例に意味を与えて命題化するしくみを確認したが、それは換言すると、先行文脈が十分に存在しない場合には、単独の事例では意味が確定しないということになる。たとえば、(10)「暑げなるもの」章段における事例提示は、唐突である。

- (10) a 暑げなるもの
 b 随身の長の狩衣。
 c 衲の袈裟。
 d 出居の少将。

〈以下略〉

(119段 暑げなるもの)

「随身の長の狩衣」は、新全集集釈にも「武装して天日に照りつけられて座っている狩衣姿を「暑げ」と言ったのか」とあるように、事例提示の意図が不明である。それに次ぐ「衲の袈裟」も同様に「種々の布帛を厚く縫い綴って作った袈裟」と注釈され、高級品であるから、法会において高僧の着用する物であることは理解される。しかし、「袈裟」だけから「暑げ」という根拠は見だしにくい。「出居の少将」は、野外の儀式において庭に設けられる座にあって、近衛少将が威儀を正すものである。必ずしも炎天下とは限らない。いずれも単独では、「暑げなるもの」の典型事例とは言いがたい。

ただし、この三つの事例は、いずれも集団の中にある、その場を統括する役割を担う立場に立つものであることが共通し、衆目を集めるものである。aは武人たちを率いる立場である。bは僧侶たちを率いる高僧の着用である。cは朝廷儀式の現場のトップとして存在する。このように見ると、それぞれは実は、「軍事」「宗教」「行政」という社会を統治する三つの力が投影されていることがわかる⁽⁷⁾。すなわち、その社会的な力を代表して衆目を集める立場にある。

「暑い」は気温に対する人間の感覚であるが、「暑げなるもの」は「本人が暑く感じていると、他者に推測されるもの」である。社会的な立場をもって人前にあるものは、他の人びとは異なる感覚をもつだろう、と推論しているわけである。そして、「狩衣」「袈裟」という具合に職能を表す衣服を卓立することで、特定の人物ではなく、その立場だけを卓立する。官僚たる少将は、貴族としては特徴をもたないが、その代わりに、人目にふれる「出居」という場が与えられる。社会的な力を代表し、人びとの前に立つこと、すなわち、社会的な力を担うことは、同じ人間に汗をかくような緊張感をもたらすと示唆し、個人ではなく、普遍的な事柄として提示するのである。

この三つの事例は、互いの共通性から、相違点を特定することによって、それぞれ(11)のように命題化される。

(8)

- (11) b 〈武人〉 + 〈指揮〉 - 〈個人〉
- c 〈僧侶〉 + 〈高僧〉 - 〈個人〉
- d 〈官僚〉 + 〈統括〉 - 〈個人〉

並列する事例を対比し、共通点と相違点に気づくことによって、概念が形成され、「社会的な立場が、個人を変える」という命題に帰結するように構成されている。

3. 2 「あぢきなきもの」章段

「あぢきなきもの」章段では、(12)のように、不本意であるものを羅列する。これも先行文脈が存在しないが、互いに対比ができるように、構成されている。

- (12) a あぢきなきもの
 - b わざと思ひ立ちて、宮仕へに出で立ちたる人の、物憂がり、うるさげに思ひたる。
 - c とり子の顔にくげなる。
 - d しぶしぶに思ひたる人を、強ひて婿取りて、思ふさまならずと嘆く。
- (75段 あぢきなきもの)

aにおいては、「ある女性貴族」が「宮仕え」に出る。そして、不本意を感じる。bにおいては、「ある女性貴族」が「養子」をとる。しかし、かわいく思えない。cでは「ある女性貴族」が自分の娘に、それをいやがっている「婿」をとる。その結果、期待外れを嘆く。

事例の主体はいずれも「女性貴族」である。客体は「関係を結ぶ他者」である。社会参加、家の継承、婚姻と、女性貴族の人生における大事である。しかし、未体験の宮仕えに対する思い、養子にする他所の子への思い、婿にする男性に対する思いに、実態と異なるものがあつたのだろう。本人的にはそれと異なる事態に不本意となる。しかし、第三者視点から見ると、そもそも本人の当初の思い込みに問題があつたことが明かである⁽⁸⁾。それを軸として事例を見ると、問題点は(13)のようにまとまる。

- (13) b 職場に対するイメージと、現実の職場のズレ。
- c 一方的に形成した養女に対するイメージと、実物とのズレ。
- d 相手の意思を無視して形成した婿に対するイメージと、現実とのズレ。

このように命題が配列されると、相手の実態を理解していないことが「あぢきなし」という評価の原点であることが浮かび上がる。結果、「評価というものは基準次第であり、基準に問題があると、信頼性がない。そして、それは評価者には自覚されない」という論理が構成されることになる。

3. 3 対比的な命題形成

先行文脈がない場合の命題形成について観察してみると、羅列する事例が、共通の要素によって構成されていることがわかる。読者は、その要素ごとに互いを対比することで、それぞれの事例を命題化することができる。そして、さらに、その命題から、論理を構築し、筆者の主張を構成するものである。

この2章段の分析からすると、各事例は、ムダな要素がなく、構成要素がそろえてある。自然に人間観察を書いたものではなく、思考を要素分析し、命題として用意したものを、具体的事例として表現したものである。渡辺実(1981)は、これを次のように説明する。

- (14) 彼女の語ろうとするところはその彼女の実経験ではない。彼女の文章で作り上げられるのは、一回一回の経験を抜けた、一般化されたイメージなのである。(P.141)

本稿は、一般的命題が論述されているのみならず、論理が整合するよう、計算された命題が提示されていることを主張する。

「もの」型章段は、名詞述語文を並べる定型の表現を文体基調とする。その定型によって、事例の取り扱い方が指示され、それに則して、読者は命題の再構築をおこなうよう指定されている。概念、命題、論理に一定の形成方法がありその暗黙の指示にしたがうと、文章はまとまった意味をもつ。それとは異なる読解をすると、文意は収束することなく、意図不明のものとなる⁽⁹⁾。

4 語彙的な命題形成

4. 1 「しろがねの毛抜き」

先行文脈から読解に際する要素指定を受け継ぎ、並列する事例から意味の確定を得ることによって、事例は命題化される。その事例を形成するにあたっては、語彙的な選択がおこなわれる。次の(14)は、「ありがたきもの」すなわち「滅多にないもの」と章段主題を設定して、事例提示を行う。

- (15) a ありがたきもの
 b 舅にほめらるる婿。
 c また、姑に思はるる嫁の君。
 d 毛のよく抜くるしろがねの毛抜。
 e 主そしらぬ従者。
 〈以下略〉
 (72 ありがたきもの)

舅にほめられる婿がないこと、姑に思われる嫁がないこと、それはありそうな

ことではあるが、その理由を説明するのは難しい。舅はむかしの婿であり、姑はむかしの嫁である。特に指定がないので、本来同じようなものでありそうだが、マイナス評価が付されるのはなぜか。人間関係というのはそういうものだ、という安易な納得のためならば、これで完結する。しかし、それを予防して、以下の事例が提示される。

a, bには「評価するもの」と「評価されるもの」の二つの要素が共通している。d「毛がよく抜ける、銀の毛抜き」が意味するところは、この二つの要素に基づいて理解されるべきものである。毛が抜きにくいのであるから、使用者の評価は低い。では、それは価値がないのか。それに対して、「しろがね」と限定を加えている。毛抜きは、普通は「くろがね（鉄）」製品である。「しろがね」と限定することは、素材が「鉄ではなく、銀である」ことを卓立する。すなわち、貴金属であるから、使用者のマイナス評価にも関わらず、この毛抜きには本質的に価値がある。結果、「プラスの評価をもつものが、マイナス評価を受けることがよくある」という命題を形成する。

そうすると、後続のe「主せしらぬ従者」は、「従者というものはとかく主人の悪口をいうものだ」という意味ではなくなる。従者が主人をマイナス評価をしたとしても、「主」たるものに価値がないわけではない。従者に職と俸給を与え、自らは社会的地位をもつものである。これも、プラスの評価をもつものが、マイナス評価を受けるものであり、しかも、このように見ると、マイナス評価は必ずしも妥当ではない。かくして、「評価対象に価値があっても、評価主体の都合によってマイナス評価が生じる」という論理が形成される⁽¹²⁾。

ここで注目すべきは、「しろがね」という語彙選択である。それが、金属素材という語彙のカテゴリーの中から、代表的な素材である鉄ではなく、あえて銀と指定することによって、プラス評価をもたらす概念の形成をおこなうのである。ここでは、文脈対比ではなく、語彙記憶との対比によって命題が形成されている。

4. 2 冒頭命題の形成

冒頭命題は先行文脈をもたず、また、対比すべき並列事例は、後に出てくる。しかし、章段の問題意識を提示し共有する上で、もっとも重要である。それゆえ、読者の共感と疑問を喚起する事例が提示しなければならないのであるが、そのために、この語彙選択によって命題形成がおこなわれる。本稿でとりあげた2章段について確認してみよう。

- (16) a うつくしきもの
- b 瓜にかきたるちごの顔。(145段 うつくしきもの)
- (17) a あてなるもの
- b 薄色に白襲の汗衫。(40段 あてなるもの)

(16)では、「うつくしきもの」として「ちごの顔」は典型例であろうが、あえてそれを「瓜にかきたる」と限定する。これによって、赤ちゃんの顔ではなく、それが描かれた瓜が提示される。たしかにかわいいが、実物ではない。顔を描いた丸い瓜がかわいい

のはなぜか、その疑問が誘発されることになる。読者には同意と同時に疑問が生成される。それにより、かわいさの根拠に関する問題意識を喚起するのである。

(17)でも「薄色に白襲」は白と紫の組み合わせで、上品さについて読者の同意を得るだろう。しかし、それを童女の「汗衫」と指定することで、「あてなる」という社会的な地位と抵触させる。社会的な地位がもたらす美が、そうでないものにあるのはなぜか、これも読者の問題意識を誘発する。

このように、章段主題と冒頭事例の間には、単なる提示ではなく、読者の意識を誘導する語彙選択がほどこされ、その章段における問題意識の共有がなされているのである。

5 おわりに

以上をまとめると、『枕草子』「もの」型章段の命題形成には次のような型があることが明らかとなる。

- ① 事例は、先行文脈から意味を特定化されて概念のまとまりを形成する。
- ② 事例は、並列する事例と対比的に、概念の価値を特定される。
- ③ 先行する文脈、並列する事例がない場合、語彙の選択によって、特定の命題が形成される。

この①→③の順は、この文章を読解する立場から見た場合であり、著者が命題を事例化するにあたっては、逆順になる。あらかじめ主張があり、それに適した章段主題を選択し、論理を組み立てる。それに即して、論理を命題に分ち、③→②→①の順に言語化され具体的事例を構築していったものであろう。

このような文章構造においては、ムダな要素が文中にあると、読者に誤解を与えることになりかねない⁽¹³⁾。『枕草子』の「もの」型章段は、必要最小限のことばで、読者の中に論理を構成する文章である。

- (18) よき草子などは、いみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。
(72段 ありがたきもの)

清少納言は、著述にあたって、十分に考えて書くけれども、手入を繰り返さざるをえないことを述べており⁽¹⁴⁾、一般的思考を具象的な事例に落とし込む作業の困難さを表している。『枕草子』「もの」型章段は、直感的な事例の提示ではなく、緻密な計算が働いているのである。

(12)

注

- (1) 『枕草子』の論理形成については、藤原(2014)において論じ、対話的構造によって、事例から命題を形成し、それが一貫した論理となることを論じた。
- (2) この読解は藤原(2006)による。「夏は夜」の連は、美が自然そのものではなく、それを見る人の心に由来することを述べる。
- (3) eとfについては、必ずしも共感できるものとは言えず、「をかし」を述語とすることで著者の意見であることを表示する。藤原(2016)。
- (4) 用例の検索には、東京大学資料編纂所「古記録フルテキストデータベース」<http://wwwaphi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller> を利用した。
- (5) 本章段の解説については、藤原(2017)において論ずる。
- (6) 本章段の解説は、藤原(2008)に示す。
- (7) 社会を統治するにあたり、物理的な力をもつものが軍事である。心理的な力を行使するものが宗教である。社会的な力を有するものが行政である。
- (8) 「あぢきなし」の意味分析と本章段の解説は、藤原(2014)に示す。
- (9) 渡辺(1981)は、「もの」型章段の冒頭句を「共通述語」とし、名詞句の羅列を主語相当と見る。そのため、文章の首尾の一貫が得られない。藤原は冒頭句を「章段主題」とし、羅列される名詞句を「述語」と見る。そうすると、各事例は主述が確定し、命題を形成できる。
- (10) 本章段の解説は、藤原(2016)に示す。
- (11) 三巻本に比して、他の写本は書き足しが多い。清少納言が予定した著述のルールが共有されなくなった結果と推定する。
- (12) 藤原(2016)の解説による。章段全体の文意がまとまるには、この部分は、書写作业ではなく執筆作業である必要がある。

資料

松尾聡・永井和子(1997)『新編日本古典文学全集(18) 枕草子』小学館

用例の検索には国立国語研究所・日本語歴史コーパス・平安時代編を利用した。(http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/)

参考文献

- 川上徳明(1966)「枕草子「もの」型文の構造—その成立過程を通して—」『国語学』64, 国語学会, pp.60-70
- 渡辺実(1981)『平安朝文章史』東京大学出版会
- 藤原浩史(2008)「『枕草子』「うつくしきもの」の国語学的解釈」『紀要』219, 中央大学文学部, pp.105-140
- 藤原浩史(2010)「『枕草子』における概念形成—副助詞「など」の運用—」『古代語研究の焦点』武蔵野書院, pp.403-425
- 藤原浩史(2014)「『枕草子』の論理形成—潜在的論理と対話的構造—」『エネルギー』39, ドイツ語文法理論研究会, pp.19-32
- 藤原浩史(2016)「『枕草子』における章段主題の述語反復」『文法記述の諸相Ⅱ』中大出版会, pp.35-54
- 藤原浩史(2017)「『枕草子』の対話的な文章構造」『歴史語用論の方法』ひつじ書房(近刊予定)
(ふじわらひろふみ 本学教授)